

学 位 論 文 要 旨

研究題目

Relationship Between p16 Expression and Prognosis in Patients with Oropharyngeal Cancer Undergoing Surgery

(中咽頭癌手術症例における p16 と予後の検討)

耳鼻咽喉科・頭頸部外科学 (指導教授 阪上雅史)

氏 名 貴田 紘太

【目的】中咽頭癌手術症例において、p16 陽性群と陰性群の予後を比較検討することにより、今後の治療方針を検討する際の有用な情報を得ること。【対象と方法】2000年1月～2009年12月までの10年間に大阪国際がんセンターで、一次根治手術を行った中咽頭扁平上皮癌94例のうち、p16の免疫染色が可能であった64例。性別は男性51例、女性13例。年齢は41-80歳(中央値62歳)。生存例の観察期間の中央値は7年3か月であった。手術により摘出された原発巣を用いて、病理組織学的にHPVのサロゲートマーカーであるp16の免疫染色を行い、p16陽性群とp16陰性群の比較を行った。【結果】1)患者背景:p16陽性群は28例(43.8%)、p16陰性群は36例(56.3%)であった。男女比はp16陽性群で男性25例、女性3例、p16陰性群で男性26例、女性10例であった。年齢はp16陽性群で41-80歳(中央値61歳)、陰性群で41-78歳(中央値64歳)であった。T分類では両群間に有意差を認めなかったが、N分類ではp16陽性群の方がN+症例が有意に多かった($p<0.01$)。またStage分類においてもp16陽性群の方がstageⅢ-Ⅳ症例が有意に多かった($p<0.05$)。2)2群の粗生存率、疾患特異的生存率の比較:2群間で粗生存率、疾患特異的生存率に有意差を認めなかった。3)進行度による生存率の比較:StageⅠ-Ⅱ症例において、2群間に有意差は認めなかった。またStageⅢ-Ⅳ症例においても、2群間に有意差は認めなかった。4)術後照射症例の生存率の比較:p16陽性群のうち、術後照射を行ったのは18例あり、p16陰性群のうち術後照射を行ったのは6例あった。いずれの生存率においてもp16陽性群の方が有意に予後が良好であった($p<0.05$)。5)StageⅢ-Ⅳ症例の術後照射の有無による生存率の比較:p16陽性群StageⅢ-Ⅳでは術後照射症例の方が非術後照射症例に比較して有意に予後が良好であった。p16陰性群StageⅢ-Ⅳでは術後照射症例と非術後照射症例の生存率に有意差は認めなかった。【結論】p16陽性群とp16陰性群で生存率に有意差を認めなかったが、p16陽性群の術後照射例はp16陰性群の術後照射例と比較して有意に予後が良好であった。HPV陰性中咽頭癌では手術適応が拡大するが、術後照射の効果が低いため、十分な安全域をとった手術を心がける必要があると考えられた。